広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	高齢者にとってAdvance Care Planning は 人生の意味にどのような影響を与えるか ： 希少性ヒューリスティクスの視点から
Author(s)	松林, 克典
Citation	広島大学マネジメント研究 , 25 : 22 - 22
Issue Date	2024-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055764
Right	Copyright (c) 2024 by Author
Relation	

高齢者にとって Advance Care Planning は人生の意味にどのような影響を与えるか

―希少性ヒューリスティクスの視点から―

松　林　克　典

１．研究の背景

超高齢社会の我が国では，高齢化と共に死亡数増加も顕著である。多死社会が進展する中，今後は自宅や老人ホーム等による病院以外で死を迎える高齢者が増加するだろう。とりわけ，介護保険施設での看取りも増加するであろう。しかし，現実には施設における看取り数はそれほど増えていない。介護施設で看取りが増えない理由は，施設側と利用者側のそれぞれにあり，施設側の理由として，看取り介護を実践するための体制づくりの難しさがある。利用者側の理由として，入所者本人やその家族が，施設を最期の場所として選択する判断を，予め表示できていないため，意図せず病院で死を迎えるケースもあると考える。このような本人による最期の迎え方についての意思表示のために，国から2018年に ACP（Advance Care Planning）という考え方が提唱された。

２．ACP（Advance Care Planning）について

ACP は，約60年前の LW（Living Will；生前の意思）の着想から発展し，AD（Advance Directive；事前指示書）として米国では法整備もされている。ACP は，これら LW や AD を包含するが，我が国では未だ国民の多くに浸透していない。メリットが伝わっていないからだと考える。これまで AD のメリットについて多くの研究が行われてきたが，我が国では AD に取り組んだ高齢者の変化に関する研究は多くない。ACP の取り組みは，最期の場面，すなわち死を想定したシミュレーションである。必然的に自らの死をイメージする。筆者は，その死の想起が，生の希少性を惹起し，希少性ヒューリスティクス（Laura A. King ら，2009）から生の大切さや重要性を引き出し，人生の意味を向上させると考えた。

３．社会実験

介護保険通所サービス事業所に通う要介護・要支援高齢者79名（平均年齢86.23±5.30歳）を対象に，ACP に取り組む集団を実験群，経済状況等の質問に取り組む集団を対照群として比較した。各々の質問への取り組みを思考的介入とし，その違いが，死に対する考えや価値観である DAI（Death Attitude Index；臨老式死生観尺度）や，人生の意味を理解し，その存在意義と意味を探求する MLQ（Meaning in Life Questionnaire；人生の意味尺度）保有と探求にどう影響するか，さらに自尊感情との関わりも検討して ACP の効果を探った。

４．結果

主に三つの結果が示された。第一に，思考的介入の違いによる価値観や考え方への影響は認められなかった。

第二に，対象者全員の MLQ 探求と DAI の死への関心項目の得点が有意に上昇した。

第三に，MLQ 保有に対して，死に対する恐怖，回避思考と思考的介入の違いによる有意な交互作用が認められた。単純傾斜分析では，恐怖が強い人が，ACP によって人生の意味を有意に下げる傾向が示され，逆に恐怖の弱い人がそれらを高めることがわかった。

５．考察

第一の結果の理由として，対象者のほとんどが慢性疾患を抱えた高齢者であったことが，要因ではないかと考えた。つまり，人生の意味を理解し，その存在意義から有意義となる何かを求めるといった思考について，既に多くのことを達観し，生きる目標をたて，これからを思考的にポジティブになるといった展開になりにくく，希少性ヒューリスティクスによる生の価値観転化，すなわち人生への意味への影響が起こりにくかったと考える。

第二の結果の理由として，両群ともに死生観を問う質問をしたための影響と考えられた。

第三の結果について，計画段階では存在脅威管理理論（Greenberg ら，1986）を援用して，死に対する恐怖が強い人ほど ACP への取り組みという思考的介入による防衛反応として，人生の意味についての考察を高め，自尊感情も高まると予測していた。分析の結果，ACP への取り組みという思考的介入は，死に対する恐怖心が弱い場合に，人生の意味の保有及び探求についてポジティブな影響を与えることが示された。存在論的恐怖は主観的な不安を高めず，死について強く考えすぎると防衛反応が弱まるということから，ACP による死関連思考への影響が強すぎる可能性が考えられた。一方で，意識下，あるいは前意識下において，死に対する恐怖・不安意識の弱い人には，ACP による死関連刺激が，自然に存在脅威防衛反応を生じさせ，自尊感情を高める効果が表れたと考える。

６．結語

実践的には，ACP が，死への恐怖心が強い人，あるいは老齢期で自尊感情が低くなっている人にとっては，不安の増強やさらなる自尊感情の低下を招く可能性が示唆された。したがって，ACP 取り組みの前段階において，死生観や自尊感情を調査し，死に対する恐怖が強い人や自尊感情の低い人には，何らか恐怖を緩衝させるような取り組みや自尊感情を高めた状態で，ACP に取り組むことが重要と考えられた。